太宰治「十二月八日」試論

―〈語り＝騙り〉構造―

何　資　宜

一　はじめに

太平洋戦争開戦という全国民を巻き込んだ軍部の一大イベントに対し、太宰治は「十二月八日」（『婦人公論』昭和十七年二月）という作品を世に送った。日米開戦を背景にして生まれた「十二月八日」への評価は、〈作家太宰治〉の戦時下スタンスを問う形でなされるものが多い。しかし、この作品を戦争に加担したか否かという二分法で裁く場合には、「いまだに抵抗か迎合かに分かれている観がある」[1]という結果が生じる。

太宰の〈迎合的姿勢〉を指摘した論説は、「生真面目に開戦の日の興奮を綴」った「私」の言葉に焦点を置く傾向があり、この作品を「太宰の昂ぶりを素直に書きとめた戦争小説」[2]として定義する（傍点引用者、以下同じ）。一方、〈芸術的抵抗〉を評価する論説は、「不精」な「小説家」に注目し、その滑稽な言動に「戦争体制からはみ出した作家自身」[3]の姿を見出し、「ここに登場する太宰の姿はユーモラスでむしろ諷刺的でもある」[4]と説く。このように、登場人物の言動に着目し、さらにそのどちらに〈作家太宰治〉をあてはめるかによって、作品への評価が変わってくることが分かる。[5]

しかし、この作品には日米開戦という主軸からはみ出した〈脱線の記述〉や〈過剰な情報〉が存在することも見落としてはならない。一見して〈不要〉と思われるこれらの情報は、今まで触れられてはいるものの、それを正面から検証する論説は極めて乏しい。本稿は作品から〈作家太宰治〉をいったん切り離し、物語内における〈過剰な情報〉の挿入や語りの操作によって誘導された読みを提示しながら、最終的には、「十二月八日」における〈語り＝騙り〉構造を究明する。

二　〈同時代言説〉の挿入

「けふの日記は特別に、ていねいに書いて置きませう。」という一文から始まったこの「日記帳」は、「昭和十六年の十二月八日」という「大事な日」を後世に伝えるために書き記されたものであると「私」は語っている。「此の日記帳」の全体を眺めてみると、「マレー半島に奇襲上陸、香港攻撃、宣戦の大詔」といった「ニュウス」、「市場」の様子、当時の物価、そして戦時中の「燈火管制」などが描かれ、それらの言及からは、確かに開戦当時の庶民の生活が窺える。

しかしそうした戦時下の生活と出会う前に、われわれ読者はまず冒頭において、次のような記述を目にする。

> 主人の批評に拠れば、私の手紙やら日記やらの文章は、ただ真面目なばかりで、さうして感覚はひどく鈍いさうだ。センチメントといふものが、まるで無いので、文章はちつとも美しくないさうだ。本当に私は、幼少の頃から礼儀にばかりこだはつて、心はそんなに真面目でもないのだけれど、なんだかぎくしやくして、無邪気にはしやいで甘える事も出来ず、損ばかりしてゐる。慾が深すぎるせゐかも知れない。

「紀元二千七百年まで残るやうな佳い記録を書き綴る」という冒頭のことばにもかかわらず、「私」の性格がはたして「真面目」なのか、「私」の「幼少」期がどうだったのかは少しも明らかにならず、これらの記述は「百年前の大事な日」を知るための「参考」には全くならないのである。

この「主人の批評」は、戦時下の庶民生活の描写とは無関係な言葉であったため、今まで容易に見過ごされてきたが、この「批評」を仮に信用すると、「感覚はひどく鈍」くて「センチメントといふもの」が皆無で、「無邪気にはしやいで甘える事も出来」ないという、「真面目な」「私」の人物像が浮上してくる。だが、こうした「私」像と、のちに出てくる「私」の語りとを照らし合わせてみると、両者が噛み合わないことが明らかになる。

> しめ切つた雨戸のすきまから、まつくらな私の部屋に、光の差し込むやうに強くあざやかに聞こえた。二度、朗々と繰り返した。それ（引用者注、開戦を告げる大本営発表）を、じつと聞いてゐるうちに、私の人間は変つてしまつた。強い光線を受けて、からだが透明になるやうな感じ。あるひは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがふ日本になつたのだ。

「戦意高揚感が全身を「強い光線」が貫くように感じられ、まるで「聖霊の息吹き」を受けて、ある使命感を吹き込まれたかのよう」[6]だと解釈されているこの感想は、洗練された筆致で描かれたものであり、「非常に感覚的に美化して捉えられ」、「当時の、悲壮感に半ば酔ったような多数の国民の心情―美意識をも代弁している」[7]という印象も与えるものである。このような〈美しい〉感想は、「ただ真面目なばかりで、さうして感覚はひどく鈍」くて「文章がちつとも美しくない」という「私」の人物設定とは明らかに異なっている。さらに、もう一ヶ所を提示してみよう。

台所で後かたづけをしながら、いろいろ考へた。目色、毛色が違ふといふ事が、之程までに敵愾心を起こさせるものか。滅茶苦茶に、ぶん殴りたい。支那を相手の時とは、まるで気持がちがふのだ。本当に、此の親しい美しい日本の土を、けだものみたいに無神経なアメリカの兵隊さんどもが、のそのそ歩き廻るなど、考へただけでも、たまらない。此の神聖な土を、一歩でも踏んだら、お前たちの足が腐るでせう。お前たちには、その資格が無いのです。日本の綺麗な兵隊さん、どうか、彼等を滅つちやくちやに、やつつけて下さい。

「私」のこの言説には、確かに一読すると、「妻や近隣の者たちの戦争突入に対する心構え」が見られ、「国策文学の典型ともいえる体裁を成している」[8]と思われる。しかし、引用文に注目してみると、その異様な興奮には「こども相手の紙芝居の台詞ではあるまいし」[9]という印象がぬぐえず、冒頭部の「無邪気にはしやいで甘える事も出来」ないという「私」像とは明らかに矛盾しているのである。

それらの矛盾を見落とした従来の論は、前述した「私」の語りを鵜呑みした結果、この小説を「〈戦争批判〉どころか、大東亜戦争開戦の日の昂ぶりを素直に、美知子夫人の言うところの〈大衆の中の一人〉としての感覚で書き上げた戦争文学なのである」[10]と解釈する。さらに、作品を通して作家の〈本音〉を見出そうとする読者は、「おそらくこれはまた多分に太宰自身の本音ともいうべきものではなかったか」[11]（傍点引用者）と大胆に推測し、しまいには、「太宰も文壇渡世上、このような民族差別ともいえるアメリカ人への嫌悪をあらわさざるをえな」[12]いというように、〈作家太宰治〉の戦時下スタンスを決めつけてしまうのである。

だがここで注目したいのは、「私」の人物設定と矛盾するこれらの感想と同時代のメディア言説との関連である。当時のメディア言説について、松本和也氏は、対米英開戦の「ラジオ放送に心身を揺さぶる感動を受け、これまでのもやもやがカラッと吹き飛び、国民としての自覚を新たに国家に一体化し、日本を崇め感謝する、というのが当時の〝十二月八日〟言説が共有した構造」であると述べて

いる。それを踏まえながら、ここではさらに同時代の活字メディアに掲載された人々の感想をいくつかピックアップする。

◎　暁近いころには西太平洋の全戦場から戦報くしの歯をひく如く、万事は順調に進んでいること明らかとなる。やがて昭和十六年十二月八日の暁天に旭日の光が輝きはじめた。清々しい朝の気を上甲板に立って胸一杯に吸う。大きな戦争が今日より始まったというのに何と静かな朝であろうか、今未明以来長官も参謀も又幕僚もいとも静かに落着いた振る舞いである。戦の全責任を負う最高指揮官という立場を想像して、興奮さえ覚えた私の目に映る長官の姿の、何と淡々としていることか。（後略。傍線引用者、以下同じ。）[13]

（藤井茂　当時・連合艦隊参謀）

◎【言いしれぬ感激】

わたしの一生のうちで、これほど感激の一瞬はまたとあるまい。（中略）日本は起つべくして起つたのであり、むしろそのおそきをうらむといつた感情で今日の日を希つていたのだから対米英開戦のニュウスを耳にしても、慌てたり驚いたりするものは一人もあるまい。来るべきものが遂にきたという厳粛な気もちだけに、言いしれぬ感激をおぼえるだけである。[14]

（岩田日出刀当時・建築学者）

傍線部に注目すると、当時を生きた人々は、それぞれ違う立場に立っていたにもかかわらず、「ほとんど申し合わせたかのように、暗雲が一挙に晴れてからっとした気持ちにな」[15]り、実に似通った表現を口にしていたことが分かる。太平洋戦争開戦を語る史料は膨大な数にのぼるが、そのほとんどは軍の勝利を報道する記事や、国民の愛国心を煽る社説などによって染められている。「文芸雑誌は各誌とも原稿の入替えを行なったらしく、店頭の新年号」（昭和十七年）は「開戦」で色どられ、「まさに戦意高揚文の洪水」[16]に溢れていたという。

メディアに氾濫するこれらの〈戦時中の大合唱〉と共通する記述は、前に引用した「私」の語りにも見られるが、同時代の〈十二月八日言説〉と「著しい相同性をみせ」ているという松本氏の説を裏返せば、これらの記述は、文学者である太宰があえて活字メディアに載せられた「国民の声」を、コラージュ形式で「特別に、ていねいに」織り込んだものだと読むべきではないか。

言ってみれば、作中に現れた「私」の語りは、〈作家太宰治〉の〈本音〉というより、むしろ「大多数の国民の声」の繋ぎ合わせそのものであり、それぞれの表現・言葉遣いが異なっているのも頷けるであろう。さらに言えば、「大多数の国民の声」をそのまま書き

写すことは、作品の冒頭にある「だから文章が大変下手でも、嘘だけは書かない」、「紀元二千七百年まで残るやうな佳い記録を書き綴る」（傍点引用者）という企てを具現化したものであると思われる。

三　〈作家太宰治〉を思わせる〈情報〉

前述したように、「私」の語りには〈同時代言説〉という〈情報〉が織り込まれているのだが、この作品が単なる〈記録文学〉にとどまらないのは、作中に登場したもう一人の人物、「小説家」の言動が書き込まれているからである。ここではその「小説家」の造形に迫り、その言動に注目する。まず、「西太平洋において米英軍と戦争状態に入れり」という「大詔」を聞いた「主人」の語りから見てみよう。

「さうか。」と不機嫌さうに言ひ、しばらく考へて居られる御様子で、「しかし、それは初耳だつた。アメリカが東で、日本が西といふのは気持ちの悪い事ぢやないか。日本は日出づる国と言はれ、また東亜とも言はれてゐるのだ。太陽は日本からだけ昇るものだとばかり僕は思つてゐたのだが、それぢや駄目だ。日本が東亜でなかつたといふのは、不愉快な話だ。なんとかして、日本が東で、アメリカが西と言ふ方法は無いものか。」

ここからは〈大東亜共栄圏〉というスローガンが想起されるが、それに加え、「日本は、本当に大丈夫でせうか。」と問う「私」に、「大丈夫だから、やつたんぢやないか。かならず勝ちます。」と答える「主人」の言葉は、それ自体では「極端すぎる」「愛国心」の表れそのものである。しかし不思議なことに、こういった「極端」な「愛国心」は読者の目には太宰の〈芸術的抵抗〉として映っている。

いうまでもなく、この作品の主人公である「私」は、ただ「三鷹のこんな奥」に住む、ある「日本のまづしい家庭の主婦」として登場しており、「私」がその「大事な日」に訪れた場所も、すべて「駅」、「街」、「市場」といった不特定な名詞によって記されている。また、「歴史の参考になるかも知れない」という「此の日記帳」も、「どこかの土蔵の隅から発見」されるだろうと「私」は語っている。しかし、このどこにもいそうで、特に名の無い「わが日本の主婦」の「主人」は、なぜか読者には〈作家太宰治〉であると受容されている。

この「主人」＝〈太宰治〉という〈読み〉は、登場した「主人」の人物造形と密接な関係があると思われるが、その人物像は、やはり戦争とは無縁の「馬鹿らしい」会話や「呆れる」やり取りによって作り出されている。そこから現れたのは、「小説を書いて生活してゐる」が「なまけてばかりゐ」て、そうして「いつも嘘ばかり」言い、「どこまで正気なのか」さえ分からない「不精」な「主人」

像である。また、このように造形された「主人」は、「伊馬さん」、「亀井さん」、「早大の佐藤さん」、「堤さん」、「今さん」などと呼ばれる友人を持ち、「園子」という娘も持っており、さらに、「園子」には括弧書きで「（今年六月生れの女児）」という説明がある。いわば、ここに登場した「小説家」像や、それにまつわる人々の名前、括弧書きの説明などは、作品外部における太宰の実生活への回路となり、この架空の物語を現実の反映だと思わせる仕掛けとなっている。

こうした仕掛けを目にする読者が「此の日記帳」を解釈する際、作品内部の「小説家」と作品外部にいる〈作家太宰治〉を同一視して読むのも無理はないのであろう。そしてこのような図式を前提にして、その「小説家」の「極端すぎる」「愛国心」を解釈すると、次のように見方が変わって来る。

たとえば、万世一系の天皇を象徴する「紀元」が頻繁に現れてくることについて、松本健一氏は「今日本は皇紀何年か」（「新潮」平成元年一月）において次のように解釈する。

「紀元二千六百年」という圧倒的事実のまえに置かれて手足も出ない自己をみずから茶化すことによって、手も足も出してみせたのである。（中略）愚にもつかぬ話題に堕としてしまうレトリックによって、「紀元二千六百年」という天皇制国家の輝かしいイベントさえ漂白してしまったのである。それが、太宰治の抵抗の流儀であった。（傍線引用者）

さらにもう一つ例を挙げてみると、「アメリカが東で、日本が西といふのは気持ちの悪い事ぢゃないか」という主人の言葉について、鈴木敏子氏は「「十二月八日」（太宰治）解読」（「日本文学」平成十年十二月）において次のように解釈する。

時の絶対権力大本営がおそらく何気なく使ったにちがいない西太平洋を逆手にとっての痛烈な、過激なまでの戦争批判、国粋主義批判ではないか。（中略）それをこの主人は一見地理音痴、国策順応と見せかけながら、愚弄しているのだ。これは自己を滑稽化、戯画化することによって対象をもコケにし、その欺瞞を暴くという反語的手法である。（傍点は鈴木氏。傍点引用者による）

このように、「主人」＝〈太宰治〉という読みのコードを装着すれば、「小説家」の露骨な「愛国心」はすべて〈茶化〉され、〈反語的〉・〈戯画的〉に読み取られるようになるのである。そしてそれに加え、「真面目な」「私」と「呆れる」「主人」という対蹠的な設定もそうした〈読み〉を助長し、結果的に「愛国心の旺盛な女房を主

役に仕立てて盛んに鬼畜米英論を展開させ、その女房から見てまことに頼りない夫の無能ぶりを揶揄することで、逆に戦時体制からはみ出して生きる太宰自身の立場を言外に主張しているのである」[17]とまで解釈される。

作品における登場人物の造形や記号としての人名を、作家の伝記・友人の回想録といった外部資料を照らし合わせて読めば、「小説家」の造形から作品外部の〈作家太宰治〉とリンクさせてしまい、その「小説家」の「愛国心」が「極端」すぎればすぎるほど、〈天才道化師〉である太宰の〈芸術的抵抗〉と読むようになったのである。なぜなら、彼らに言わせれば、「日本には数少ない風刺文学を書き得る才能をもった」[18]「太宰治ともあろう作家が、なんの見境もなくすっかり好戦気分に酔い痴れてしまっていたとはかんがえられない」[19]からである。

換言すれば、〈道化作家太宰治〉の〈芸術的抵抗〉が見出されたのは、物語に登場した「小説家」の人物造形や作中に織り込まれた〈過剰な情報〉によってであるが、それは太宰の〈愛読者[20]〉の〈私小説的な読み〉を逆用した戦略でもあるといえよう。

四　終戦後の再録問題

この作品を検討する際、もう一つ視野に入れなければならない問題点がある。安藤宏氏は「太宰治・戦中から戦後へ」（「国語と国文学」一九八九年五月）において、次のように述べている。

戦後、太宰治が戦中の自作を著作集に再録するに際し、本文にかなり手を加えている事実は、これまであまり問題にされる事がなかったようである。

（中略）

肇書房版『佳日』についていえば、戦争の為に死ぬ〈崇高な献身の覚悟〉を称える「散華」が、やはり日本出版版では全文削除されているし、開戦日の精神の高揚を描いた「十二月八日」（昭和17・2）、「新郎」（昭和17・1）など、戦後筆者自身によってその存在を〝抹消〟された作品は他にも数多い。

「太宰文学における戦中―戦後の〝断続〟」を再検討しようとする氏のこの説を皮切りに、太宰の「忸怩たる思い[21]」（傍点引用者）への解釈が、この作品を論じる際には避けては通れない課題となっている。

作家の「忸怩たる思い」という視点での再録問題の解釈は、その作家が時流＝戦争に加担したか否かという問いを内包している。また、「抹消」というインパクトの強い言葉で再検討する場合も、それが戦時中の失敗作であることが前提となっている。だが今まで見てきたように、この「十二月八日」は同時代の戦争言説と文壇に

おける〈私小説的な読み〉を意識しながら、数多くの情報が周到に配置される織物（フィクション）であり、戦後の著作集を問題にするにあたって、それをふたたびその作家の戦争責任問題のみに還元するのはあまりにも短絡的だと言わざるをえない。

終戦後から太宰他界までの間に出された自作の作品集は三十二冊あるが、そのうち、戦時中に刊行された紙型を用いて再版、あるいは改装された創作集は以下の六冊である。

○南北書園版『愛と美について』（昭和二十年十二月）昭和十四年五月、竹村書房刊『愛と美について』の紙型を用いたものとみられるが、巻頭の「読者に」が削除されている。

○南北書園版『八十八夜』（昭和二十一年三月）昭和十七年五月、竹村書房刊『老ハイデルベルヒ』の紙型を用いたものとみられるが、「愛と美について」、「新樹の言葉」、「花燭」が削除されている。

○増進堂版『右大臣実朝』（昭和二十一年三月）奥付には「昭和十七年九月五日初版印刷／昭和十七年九月十日初版発行／昭和二十一年三月二十日第三刷発行」とあるが、錦城出版社版の初版発行は「昭和十八年九月二十五日」であり、また、増進版の第二刷は見られないようである。

○南北書園版『八十八夜』（昭和二十二年二月）昭和二十一年三月、南北書園版『八十八夜』の改装版で、所収は同じ。カバー平、背に「太宰治短編集」とある。

○日本出版社版『黄村先生言行録』（昭和二十二年三月）昭和十九年八月、肇書房刊『佳日』の紙型を用いたものとみられるが、部分的に語句の訂正が施され、「散華」と「花吹雪」が削除されている。

○和光商事合資会社版『愛と美について』（昭和二十二年七月）昭和二十年十二月、南北書園版の『愛と美について』と同様、昭和十四年五月、竹村書房版『愛と美について』の紙型を用いたもので、「読者に」が削除されている。

この中で、「佳日」の字句訂正や、「散華」の削除などに注目した安藤氏が、特に問題視しているのは日本出版社版『黄村先生言行録』である。だが、「十二月八日」に限って言えば、この作品は戦時中のどの刊行本にも収録されていなかったため、「戦後世論を憚った部分的な修正」や、「戦後筆者自身によってその存在を〝抹消〟された」[22]といった問題には直面しない。むしろここで疑問に思うのは、この作品はへなぜ戦後のどの作品集にも再録されなかったか〉、ということである。

この疑問を解く前に、まず戦後のマスコミ・ジャーナリズム界の動向、及び書籍出版物の検閲事情に触れておきたい。昭和二十年八

月十五日を境に、ジャーナリズム界の動向がまさに百八十度反転され、終戦とともに「マッカーサー占領軍総司令官は、いちはやく戦時体制下の諸法や諸制度を解体」し、アメリカ式の「自由主義」「民主主義」を占領下の日本に移入し、「軍国主義の払拭に着手した」という。こうした方針の下で、GHQ／CCD（民間検閲所）[23]はまず東京地区の新聞を対象に検閲を始めたが、次いで九月三十日には九章にわたる「日本における新聞・演芸・ラジオ放送検閲マニュアル」が出来上がり、「一〇月には、書籍の事前検閲は東京地区で開始」[24]したという。こうした複雑な組織・規定を有するGHQ／CCDの検閲内容は、占領軍関係、連合国関係、旧思想関係、社会不安関係などに分けることができるが、「まず第一に占領軍や連合国の安全と利益を守る上で必要とされた」[25]という。

こうした検閲基準の下では、太宰の「十二月八日」は〈自己規制〉の対象とならざるを得ないものであろう。なぜなら、この作品に含まれている、「本当に、此の親しい美しい日本の土を、けだものみたいに無神経なアメリカの兵隊さんどもが、のそのそ歩き廻るなど、考へただけでも、たまらない。此の神聖な土を、一歩でも踏んだら、お前たちの足が腐るでせう。（中略）日本の綺麗な兵隊さん、どうか、彼らを滅つちやくちやに、やつつけて下さい」、「アメリカが東で、日本が西といふのは気持ちの悪い事ぢやないか。日本は日出づる国と言はれ、また東亜とも言はれてゐるのだ。太陽は日本からだけ昇るものだとばかり僕は思つてゐたのだが、それぢや駄目だ。」といった米国や米軍への言及は、真っ先に戦後GHQ／CCDの検閲にひっかかってしまう恐れがあるからである。[26]

さらに、戦後の検閲と戦時中の検閲との相違点は、その基準内容だけではない。とりわけ書籍出版の場合、戦後の文学者を最も困らせたのは、検閲で指摘された問題の箇所を編集・修正しなければならないことである。これについて、当時「群像」の編集を務めていた大久保房男は次のように回想している。

> 検閲係は、ここがいけないと言わず、いつまでも許可が下りないから、度々出向くと、やっとこの辺が、と問題の個所のあたりを鉛筆の尻で示す。そこを削除するのだが、日本の検閲のように×××とか、（二行削除）などとはせず、どこを削ったかわからぬように前後の文章をうまく繋がねばならぬ。（中略）言論の自由を重んじているという国が言論を抑圧している証拠を残さないのだ。日本の検閲より質が悪いと思った。[27]

氏のこの回想から戦後出版物における検閲の実態が浮上してくるが、それを踏まえると、仮に「十二月八日」の戦後出版を希望したとしても、前述した米軍への言及を伏せ字、あるいは数行削除という表記で処理することは許されず、削除の痕跡をすべて消さなけれ

ばならないのである。それに加え、戦時中の出版物を戦後に再収録する場合、安藤氏の指摘のように、「後者（筆者注、戦後版）は前者（筆者注、戦時中版）の紙型を利用したものと思われ、字数が同一になるように入念に工夫」[28]しなければならない。このような編集・出版事情から考えると、この作品を戦後に再収録しようとしても、「戦後世論を憚った部分的修正」は実際には困難であり、作者本人が出版を希望したとしても、おそらく出版社側に提出した段階で発行者にストップをかけられたであろうし、[29]仮に再収録の企画が進んだとしても、その後の編集段階でQHO／CCDの検閲基準をクリアできなかったのではないかと思われる。すなわち、〈作者の忸怩たる思い〉[30]ではなく、戦後の検閲基準への抵触や、戦後の編集・出版事情といった外的状況が、「十二月八日」の再録の壁となっているのではないかと思われる。

五　おわりに

この作品は、一見すると「私」の綴った好戦的な語りと、「主人」の「極端すぎる」「愛国心」によって埋め尽くされている。そしてそのいずれも、軍部にとっては開戦の宣伝に好都合な記述であり、文字通り読めば、確かに「国策文学の典型ともいえる体裁をなしている」[31]ことから、戦時中に難なく情報局の検閲を通って「婦人公論」に掲載されたのも理解できよう。

だが、この作品における最大の仕掛けは、開戦当時の〈十二月八日言説〉と、〈作家太宰治〉を思わせる数多くの情報が巧みに挿入されたことである。作中にある〈同時代の戦争言説〉をそのまま鵜呑みにする読者は、〈太宰治、お前もか〉という感想を抱くが、一方、「小説家」＝〈太宰治〉と解釈した読者は、ここに作家の〈芸術的抵抗〉を見出そうとする。このように、われわれ読者はこの織物（フィクション）を読んでいくうちに、作品内部の情報と作品外部の情報を駆使しながら、それぞれの〈読み〉をなしていく。さらに言えば、作中における〈謎〉に直面する際も、作品内外の〈情報源〉を総動員して解読しようとするのである。ここでは例として、最も難解とされる最後の場面を抽出してみる。

> 銭湯へ行く時には、道も明るかったのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。燈火管制なのだ。もうこれは、演習でないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。
>
> （中略）
>
> 背後から我が大君に召されえたあるう、と実に調子のはづれた歌をうたひながら、乱暴な足どりで歩いて来る男がある。ゴホンゴホンと二つ、特徴のある咳をしたので、私には、はつき

りわかつた。

「園子が難儀してゐますよ。」

と私が言つたら、

「なあんだ。」と大きな声で言つて、「お前たちには、信仰が無いから、こんな夜道にも難儀するのだ。僕には、信仰があるから、夜道もなほ白昼の如しだね。ついて来い。」

と、どんどん先に立つて歩きました。

どこまで正気なのか、本当に、呆れた主人であります。

引用がやや長くなったが、この物語の最後の場面は、「戦争を生きた太宰を考えるとき、かなり象徴的な意味を持っているように思われてならない」[32]（傍点引用者）と佐古純一郎氏はいう。そのためか、読者は、この突如に現れた「暗い道」（「真の闇」）や「信仰」の謎解きに精を出し、ありとあらゆる〈情報〉を頼りに〈答え〉を出そうとする。〈同時代言説〉に目を向けた読者は、「暗い道」（「真の闇」）を「行き先の不透明な今後の戦時生活」[33]・「死の時代到来の暗喩」[34]と読み、一方、〈作家太宰治〉の〈情報〉にまどわされた読者は、「信仰（＝思想）」[35]・「聖書の倫理」[36]・「芸術家太宰の決意表明」[37]と置き換える。言ってみれば、この織物（フィクション）の中に挿入された数々の情報は、読者の〈読み〉を触発する役割を担っており、読者はそれらをベースにしながら、作品外部の〈情報源〉をプラス・アルファして〈謎〉を解読しようとする。こうした作業によって、物語における〈空白〉・〈謎〉はすべて恣意的に解釈され、それとともに〈正解〉は限りなく作られていくのである。

このように、この織物は作者による仕掛けが巧妙に施され、〈語り＝騙り〉[38]という緻密な構造を獲得している。しかし、従来の論は作品における仕掛けをよそに、なぜかその作家の戦中・戦後の姿勢が一貫しているか否かにのみ焦点を置いている。〈guilty or not guilty〉という評価の軸は軍事裁判の基準であり、政治的なニュアンスが含まれていることはいうまでもない。そうした尺度を用いて、小説（フィクション）を手掛けた作家の戦時下スタンスを裁く場合、戦時下作品における文学者の創作方法を不問に付すことになると思われる。この小説（フィクション）に限っていえば、むしろ「いまだに抵抗か迎合かに分かれている観がある」[39]という評価こそ、〈作家太宰治〉への最大級の賛辞であり、その評価の振幅の激しさがまさに文学者の手柄を物語っているのではないか。

注

1　奥出健「十二月八日」（『太宰治全作品研究事典』勉誠社、平成七年十一月）一二五頁。

2　赤木孝之「太宰治と戦争（Ⅰ）」（『戦時下の太宰治』武蔵野書房、平成六年八月）三五頁。

3　相馬正一「戦時下の創作活動」（『評伝太宰治　下巻』津軽書房、平成七

年一月）二三六頁。

4　奥野健男「「新郎」から「佳日」まで―中期Ⅲ」（『太宰治』文芸春秋、昭和四十八年三月）二〇一頁。

5　近年では、作品の〈両義性〉・〈多義性〉を説く傾向も目立つようになったが、管見の限り、「外部・他者への開かれ方、多様な時間軸、そして〝日常〟における〝戦争〟の表象の方法」を論じた松本和也「小説表象としての〝十二月八日〟―太宰治「十二月八日」論―」（「日本文学」平成十六年九月）を除けば、そのほとんどが〈政治と文学〉という枠組みの下に置かれた文学者の、戦時下活動の限界を提示するものであり、議論が太宰その人の戦時下スタンスに還元される傾向は依然として強い。

6　李顕周「太宰治の「十二月八日」と『婦人公論』をめぐって」（「日本語と日本文学」平成十四年二月）四五頁。

7　鈴木敏子「「十二月八日」（太宰治）解読」（「日本文学」昭和六十三年十二月）六一頁。

8　高木知子「太宰治―抵抗か屈服か」（『戦争と文学者』三一書房、昭和五十八年四月）一七七頁。

9　鈴木敬司「作品「十二月八日」へのコラージュ」（「中央学院大学総合科学研究所紀要」平成元年三月）二二七頁。

10　注2に同じ、三一～三二頁。

11　佐藤泰正「戦時下の太宰・一面―あとがきに代えて―」（『太宰治を読む』笠間書房、平成十一年十月）一六六頁。

12　注8に同じ、一七七頁。

13　引用文は、当時の参謀藤井茂が、開戦の日における山本五十六長官の様子を回想した文章の一部である。『人間　山本五十六―元帥の生涯―』（光和堂、昭和六十二年十月）四六六頁によるが、初出未確認。

14　岩田日出刀「言いしれぬ感激」（「新女苑」昭和十七年二月）。ただし引用は、『昭和二万日の全記録　第六巻　太平洋戦争　昭和16年～19年』（講談社、平成二年十一月）一一六～一一七頁による。

15　開戦直後の文壇動向について、曽根博義氏は次のように述べている。「太平洋戦争開戦に対する文学者の所感は、ただちに新聞や雑誌に発表されたが、そのほとんどは申し合わせたかのように、暗雲が一挙に晴れてからっとした気持ちになると同時に、身体のそこから闘志が燃えてきた、という類のものだった」。詳しくは、曽根博義「昭和文学史Ⅱ　戦前・戦中の文学―昭和八年から敗戦まで」（『昭和文学全集　別巻』小学館、平成二年九月）を参照。

16　池田一之「戦中文学の〝清算〟「12月8日」と文学（上）」（毎日新聞夕刊、昭和四十五年十二月八日）

17　相馬正一「戦時下の創作活動」（『評伝太宰治　下巻』津軽書房、平成七年二月）二三七頁。

18　注7に同じ、六五頁。

19　注9に同じ、一三一頁。

20　ここでは、〈太宰治〉という作家の生身と〈文壇の楽屋話〉をセットにして消費する同時代の読者・文化人と、太宰の実生活における友人関係を手がかりに、作品に登場する「伊馬さん」は伊馬春部、「亀井さん」は亀井勝一郎、「早大の佐藤さん」は佐藤安人、「帝大の堤さん」は堤重久、「今さん」は今官一であることを外部資料で割り出し、さらに、太宰の伝記を調べながら、津島夫人との間に生まれた「園子」は、作品に書かれた通り、昭和十六年六月に生まれたのだと提示する研究者的読者を想定する。すなわち、太宰治という作家とその文学的特徴を熟知したこれらの〈愛読者〉は、佐々木基一が述べているように、「ある人の書いたものが戦争を肯定したり、軍人を賛美しているとしても、その人間を個人的に知り、内心の秘密を知っている者からみれば、その人間はひそかに抵抗していたのだ」と、

〈小説家〉の姿勢を推定しようとしたのである。詳しくは、佐々木基一「解説」（『日本抵抗文学選』三一書房、昭和二十九年十一月）を参照。

21 注1に同じ、一二六頁。

22 安藤宏「太宰治・戦中から戦後へ」（『国語と国文学』平成元年五月）一〇五～一〇六頁。

23 連合国軍最高司令官総司令部の本来の略語は「SCAPHQ」であったが、当時から日本人は「GHQ」と言い習わしていたため、それが定着しているので、本稿も「GHQ」を使用する。竹前栄治『GHQ』（岩波新書、平成五十八年六月）によれば、CCDはGHQと同時に発足した民間諜報局（CIS）の一部署であり、軍隊内に常置する軍事検閲とは別に、占領地の民間人を対象とするものだった。

24 モニカ・ブラウ／立花誠逸訳『検閲　1945～1949―禁じられた原爆報道―』（時事通信社、昭和六十三年二月）五六頁。

25 内川芳美「戦後ジャーナリズムの出発」（『日本のジャーナリズム』有斐閣、平成五年七月）一〇〇頁。

26 テキストに表れた米軍への言及は、GHQ／CCDの頒布した日本出版法の規定にある「三、連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない」、「四、連合国占領軍に就いては破壊的批評や占領軍に対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない」といった項目に抵触していると思われる。日本出版法の検閲項目については、堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、平成七年六月）の巻末に付された資料（PPB文書）を参照。

27 大久保房男『終戦後文壇見聞記』（紅書房、平成十八年八月）四〇頁。

28 注22に同じ、一〇五頁。

29 GHQ／CCDによる検閲の規程を一瞥すると、出版物の内容に対してだけではなく、出版側の手続きにも細かな規定を設けていることがわかる。発行者が守らなければならない手続きは九項目もあるが、例を挙げてみると、「（前略）／四、発行者は連合国最高司令官の発令せる日本出版法規定に違反せざる記事のみを発行する責任を有す。」などとある。こうした規定が、「十二月八日」の戦後再収録を拒んでいたことと容易に想像できるが、事実、この作品が戦後に始めて再収録されたのは、CCDによる検閲が停止された一九四九年十月以降の、近代文庫版『太宰治全集』（昭和二十七年三月～昭和三十年十一月）であった。検閲項目については、堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、平成七年六月）の巻末に付された資料2を参照。

30 注1に同じ、一二七頁。

31 注8に同じ、一七七頁。

32 佐古純一郎「太宰治におけるデカダンスの倫理」（『太宰治論』審美社、昭和四十九年一月）一七九頁。

33 厳大漢「太宰治〈明るさを装う〉心構え―「十二月八日」論」（『日本語と日本文学』平成十七年二月）七八頁。

34 注7に同じ、六二頁。

35 岩田恵子「太宰治『十二月八日』論」（『無頼の文学』平成十年四月）六一頁。

36 「昭和十三年頃から昭和二十年ぐらいまで」太宰は「聖書」に傾倒し、「作品に本当にしばしば聖書が出てくる」という事実を踏まえ、その〈信じる続ける姿勢〉と〈信仰〉の内実を「聖書」に見出そうとするのは、佐古純一郎と佐藤泰正である。両氏は「十二月八日」にある「信仰」について議論しなかったものの、対談を通して、佐藤氏は、「つまり中期というのは、彼（筆者注、太宰治）の生き方の一つの覚悟を支えたものが聖書の倫理というか、聖書のあり方ではないか」とまとめているのである。詳しくは、佐藤泰正、佐古純一郎『漱石・芥川・太宰』（朝文社、平成四年一月）

を参照。

37　注2に同じ、三五頁。

38　作品内に並べられた文字をそのまま読むと一つの物語として受容されるが、一方で、作品外部における〈作家情報〉を合わせて解釈すると、さらにもう一つの物語が表れてくる。主人公の語りにつられてしまうと、作品内外に持つ二面性も見落とされがちであったため、筆者はこうした作品構造を〈語り＝騙り〉構造と呼ぶ。

39　注1に同じ、一二五頁。

附記

本稿は、昭和文学会第四十三回研究集会（於国学院大学）での口頭発表に基づくものである。その折、会場内外で示唆に富むご指摘やご教示を多数賜わった。記して深く感謝申し上げたい

―カ・シギ、国立高雄大学東亜語文学系（台湾）非常勤講師―

国文学攷投稿規定

一、本誌は広島大学国語国文学会の機関誌として、学会員からの投稿を常時募集します。

一、投稿論文の採否は、当学会役員より選出された編集委員によって構成される編集委員会で決定します。

一、採否についてのお問い合わせには一切応じません。

一、投稿論文は四百字詰原稿用紙四十枚以内を原則とします。

一、投稿論文の末尾に氏名のふりがな・所属を明記してください。

一、ワープロ原稿での投稿の際には、縦書きの場合は30字×21行、横書きの場合は40字×35行の書式を使用してください。

一、編集の都合上、なるべくフロッピーでの投稿をお願いします。その際、使用の機種・ソフト名を明記してください。ただし、必ずプリントアウトした原稿の同封をお願いします。

一、論文掲載の場合、本誌三部と抜き刷り三十部を贈呈します。余分に必要な場合は、あらかじめお申し出があれば、実費でお頒ちします。

一、本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。ただし、当学会は本誌に掲載された論文等を電子化し、公開することができるものとします。

一、投稿論文の送り先　〒七三九―八五二三　東広島市鏡山一―二―三
広島大学大学院文学研究科内
広島大学国語国文学会事務局